

672年6月24日(新暦7月24日)1350年前 大海人皇子 名張で勝敗の占い  
古代日本最大の内乱 天智天皇の太子・大友皇子 VS 大皇弟・大海人皇子  
「皇位争い」か「反乱者」

大海人皇子 天智天皇の皇太子 東宮太皇弟や、大皇弟 で表記

大友皇子 天智天皇と伊賀采女宅子娘の子(宅子娘は地方豪族出自の女を母)

大友皇子が天皇になっていない・皇位の争い 即位していた・反乱者になる

明治政府は天智天皇の太子・大友皇子を明治3年に弘文天皇の称号を追号。

『日本書紀』には大友皇子の天皇の記載なし

壬申の乱が始まるまでの簡単な歴史

562 新羅が大伽耶国を滅ぼし三国鼎立の時代開始

587「丁未の乱」仏教伝来での肯定・否定 蘇我馬子・聖徳太子／物部守屋 滅ぶ

589 隋が南朝を滅ぼし中国統一

590 高句麗王、隋が中国統一

600 第一回遣隋使 倭国の任那救援・新羅に出兵

611 隋の煬帝、第一次高句麗遠征

618 唐建国 隋を滅亡

642 新羅 毗曇の乱 金春秋が平定し 654 武烈王

643 蘇我入鹿 山背大兄王を襲撃

644 唐は新羅の要請で、高句麗(百済と同盟)攻撃

645 乙巳の変(中大兄皇子・中臣鎌足が蘇我入鹿討)蘇我蝦夷自宅放火死 天皇記・国記焼失 孝徳天皇即位・

中大兄皇子が皇太子「大化の改新」 吉野出家古人大兄王を謀反の罪で討つ

大化元年(645)12月都を難波に移す。(難波長柄豊碕宮に遷都)

大化の改新 大化2年(646年)春正月改新の詔が發布

1. 天皇直屬民(名代・子代)や直轄地(屯倉)、豪族の私地(田荘)や私民(部民)廃止。公地公民
2. 京師創設、畿内の国司・郡司・関塞、斥候・防人・駅馬・伝馬、鈴契を置き、国郡制度で整理・畿内の四至を確定  
(国、県、郡などを整理)四至 東自名壘横河。南紀伊兄山。西赤石櫛淵。北近江狭々波合坂山  
(斉明天皇に引き続き道路網を整備する)
3. 戸籍と計帳を作成、公地を公民に貸与。(班田収授法)(天智9年に庚午年籍で全国を網羅)
4. 公民に税や労役を負担させる制度の改革。(租・庸・調)

651 中大兄・間人皇后ら、孝徳天皇を置き倭に帰る。

654 孝徳天皇 難波で崩御

654年 新羅の武烈王即位

655年 唐 高句麗を攻撃

655 齊明天皇即位

656 吉野宮の造営

658 父孝徳死後、黙した有馬皇子だったが謀反密告で絞首刑

660 齊明天皇が百済救援に出るため難波宮に移る

660年 百済が唐・新羅に滅ぼされる

661 齊明天皇が朝倉宮で崩御、中大兄皇子が政治

663 白村江で唐・新羅連合軍と戦い倭軍は大敗する

664 筑前や対馬に水城 筑紫の大野、基山、長門に城を築く 各地に山城築く

唐から郭務悰 5月に来日し 12月帰国

664年 10月 高句麗の大臣 淵蓋蘇文(蓋金)亡遺言で兄弟争うな 争い 668年高句麗亡ぶ

667 近江大津宮に遷都

668 天智天皇即位・倭姫王皇后・大海人皇子を皇太弟

668年 唐・新羅連合が高句麗を滅亡 新羅による朝鮮統一

天智天皇 近江朝の時代

668 皇太子・大海人皇子と天智天皇のいさかい 中臣鎌足がおさめる

新羅使来朝 帰国に同行し新羅王に調物を持たせ 遣新羅使を送る

669 「東宮大皇弟」(大海人)病床の鎌足へ遣わす 中臣鎌足に大織冠・藤原姓・藤原鎌足が没

第6回遣唐使を派遣する

670 庚午年籍 高安城を造、長門に一城、筑紫に二城を築く 法隆寺出火全焼

唐・新羅戦争～676 唐軍の駆逐 新羅に使者 新羅から使者

671 1月に大友皇子を太政大臣に任じる 東宮太皇弟(大海人皇子)詔し、天下に大赦

671 11月17日 天智天皇が病が重く、東宮が呼ばれる。

蘇我臣安万侶を遣わし東宮を召して、この時安万侶は、東宮のよしみあり、「よく注意して教えてください」謀略か  
天皇は東宮に「天皇の坐を授く」東宮固辞して「病が多く請う、天皇は皇后(倭姫王)に、皇太子を大友皇子を  
立て、臣は今日出家し陛下のために修行する」

大海人皇子が出家し吉野へ行く。宇治まで送る人(16km)左大臣蘇我赤兄臣・右大臣中臣金連・大納言蘇我  
果安臣等。あるひと曰く「虎に翼を着けて放てり」という

19日 大海人皇子 11月20日吉野に至る(直線距離70km南北)

11月10日 唐の使者・郭務悰 捕虜をつれ 2000人到着

12月3日 天智天皇が大津宮で崩御 新羅の使者帰国

672年 唐の郭務悰は唐の国書を奉る 5月30日に帰国

672 東アジアの緊迫したなかで、壬申の乱が始まる

古事記に壬申の乱を正当化する記載があり、なぜ古事記に記載したか。序文にその企画の意味ある

古事記の企画 天武天皇(673～686年)の発案

正しい歴史と系譜を作成し後世に伝えるため企画 諸氏族が持つ帝紀と本辞が、真実と異なり、帝紀や旧辞を集め偽りを削り事実を定め後世に伝えたい。

成立 天武天皇はこの稗田阿礼に命じ天皇家の物語と系譜をそらんじ、太安万侶に筆録を命じた。

元明天皇は和銅 4 年 9 月 18 日に稗田阿礼が暗記の帝紀を撰録し献上せよと臣安万侶に仰せた。

安万侶の父・多品治(おおのほむじ)壬申の乱で功績

序文にある企画 壬申の乱 参照(古事記-現代語訳)

吉野に引きこもった大海の皇太弟は、天に昇る前の水中の竜の徳をお持ちであり、しきりに鳴る雷のように、天子となるべき時に応えられようとなさった。夢の中で歌の神託を聞き、夜の川に行き占い、天皇の位を継承なさる立場にあることをお知りになった。しかし天命の時はまだ到来しないので、吉野山に、蟬が殻を脱ぐようにお召し物を脱いで法衣に着替え、皇位を望まない立場を示しておられたが、天運と人々の心がともに備わると、東国に虎の勢いでお行きになった。天皇のみ輿はすばやく前進し、山を越え川を渡り、天皇の率いる軍は雷鳴轟くように進撃し、將軍(高市皇子)率いる軍は稲光のように先行した。天皇が矛を杖として突くと威勢があがり、勇猛な兵士らが煙のように起り、天子の赤旗の進むところ、武器がきらきらと輝いて、悪者ども(近江朝廷軍)はくだけ易い瓦のようにやすやす砕け散った

日本書紀の記述

671 年 12 月 天智天皇はお崩れになった。

天武元年(672)3 月朝廷は阿曇野連稻敷を筑紫に遣わして天皇のお崩れになったことを郭務悰に告げる。郭務悰は喪服を着て三度拳哀をし、東に向かっておがんだ。21 日唐の皇帝の国書を祀る。

672 年 5 月 30 日郭務悰ら帰途

この月・朴井連雄君(えのいのむらじおきみ)は天皇(大海人皇子)に、「私用で美濃に参りますと、朝廷は、美濃と尾張の国司に、『山陵を造るから、差し出す人夫を定めておけ』と命じておりました。ところが、その人夫のひとりひとりに武器を持たせておるのでございます。山陵を造るのではありますまい。きっと何か事変があるでしょう。早くお避けになりませんか、御身に危難が及ぶのではありますまいか。」と申し上げた。天皇は調べさせた。事は本当だった。そこで詔「私が皇位を辞して身を退(ひ)いたのは、独りで療養に努め、天命を全うしようと思ったからだ。それなのに、今、否応なく禍を被ろうとしている。私の身が滅ぼされようというのに、どうして黙っておられようか。」と言われた。

672.6.22 村国連雄依・和珥部臣君手・身毛君広に詔「近江の朝廷の廷臣たちは、自分を亡き者にしようとして謀っているとのことだ。おまえたち三人は、急いで美濃国にいき、安八磨郡の湯沐令の多臣品治に機密をうちわけ、まずその郡の兵士を挑発せよ。さらに国司たちにも連絡し、軍勢を発して、急いで不破の道を塞げ。自分もすぐ出発する。」と言われた。多臣品治の子に太安万侶

24 日 出発 吉野入から 7 ヶ月、危難を知ってから約 1 ヶ月

東国に出発の時、ある臣が、「近江の廷臣たちは、国中や道路に妨害をめぐらし、一人の兵士もなしに、素手で東国に入るはおぼつかない危険」と申し上げた。

この言に天皇は男依ら呼び戻そうと、大分君恵尺・黄書造大伴・逢臣志摩を、留守司の高坂王のもとに遣わし、馭鈴を求めさせた。天皇は恵尺らに「鈴が得られなかったら、志摩は戻って報告せよ。恵尺は馬を馳せて近江にいき、高市皇子・大津皇子を呼び出し伊勢で自分と落ち合うようにせよ。」命じた。馭鈴を授けるよう高坂王に乞うたが、王は

許さなかった。そこで、恵尺は近江へ向かい、志摩は直ちに戻って、「鈴は得られませんでした」と報告した。

初め徒歩 県犬飼連大友に会い、天皇は乗馬、皇后は御輿、津振川で乗馬が届き乗られた。

このとき、天皇に最初から従った人々は、草壁皇子、忍壁皇子、および舎人の朴井連雄君・県犬養連大伴・佐伯連大目・大伴連友国・稚桜部臣五百瀬・書首根摩呂・書直智徳・山背直小林・山背部小田・安斗連智徳・調首淡海など二十人あまり、それに女孺(めのわらわ)(皇子側近の女官)十人あまり。菟田の吾城着。大伴連馬來田・黄書造大伴が吉野から着た。土師連馬手が食事を出す。

大宇陀町の北部で、20人余りの獵師、大伴朴本連大国首領で、みな召集し従わせた。また、美濃王が一行に従った。湯沐の米を運ぶ伊勢国の馬五十匹と菟田郡家(宇陀郡榛原)の前で会い、米をみな棄てさせ、徒歩の者をそれに乗せた。大野に着くと日が暮れ、山が暗くて進めないで、村の家の垣根を壊し、それを燭とした。

名張川を渡る前に占いをする

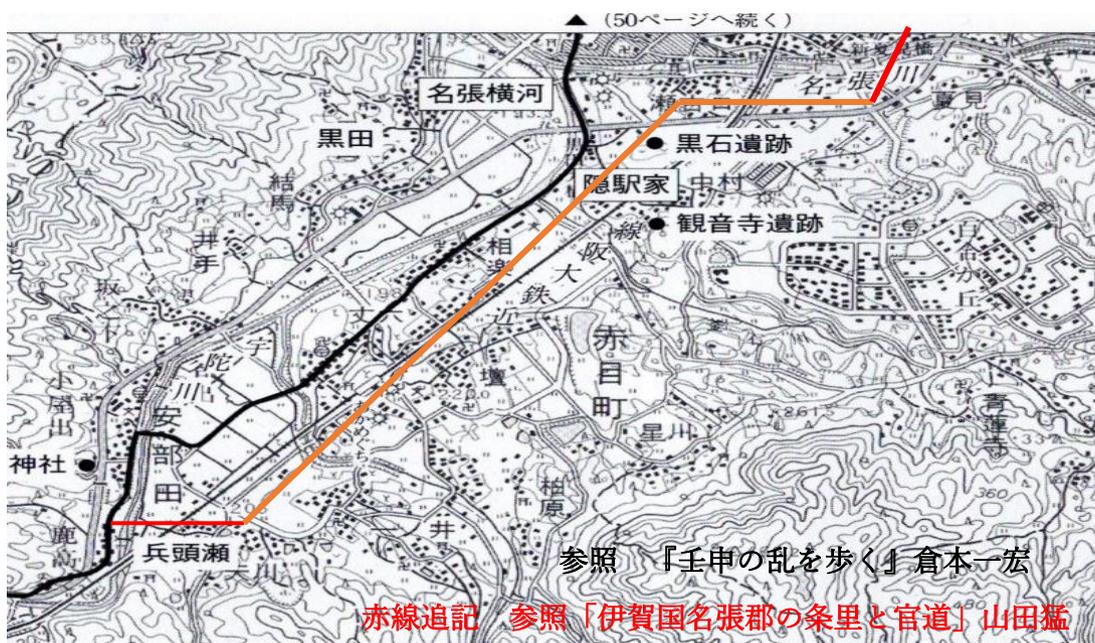
真夜中頃、隠郡(伊賀国名張郡)に着き、隠駅家を焼いた。村の中に、「天皇が東国にお入りになる。それゆえ、人夫として従う者はみな出てこい」と呼ばわったが、独りも来ようとはしなかった。

横河(名張川)で黒雲があり、広さ十余丈(1丈≒3.3m)ほどで天をよぎっていた。天皇は不思議に思われ、ともし火をかかげてみずから式(ちく)(笹竹(ぜいちく))を手にとってお占いになり、「天下が二つに分かれようとするしるしだ。しかし、自分が最後には天下を得るであろう。」と言われた。

伊賀郡、伊賀駅家を焼いた。伊賀中山で、伊賀国の郡司たちが、数百の軍兵をひきいて天皇に帰服。

25日 荊菽野に着き、行軍を中止して食事。積殖(つむえ)の山口で高市皇子が鹿深越えで天皇の一行に合流。

コメント 当時の東海道を左折し美濃への最短ルートを選び、4世紀後半の水の祭祀遺跡「城之越移籍」の近くの古郡「伊賀駅家」を焼き、天皇の到達を知らせ、伊賀の結集している兵に知らせた。神部神社を通り、財良寺跡(天武勅願寺伝承)を通り、下郡遺跡には伊賀郡家も古郡から移転したと思われる。兵の合流地点は「伊賀の中山」付近(四十九町説、比自岐から喰代・平田説、依那具の三郷山説がある)(依那具から下友生の「古代官道」の存在)伊賀国分寺跡、荊菽野の比定地の一つに荒木の近くに字「タラ」がある。





参照 『壬申の乱を歩く』 倉本一宏

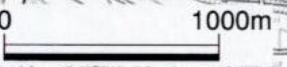
赤線追記 参照『伊賀国名張郡の条里と官道』 山田猛

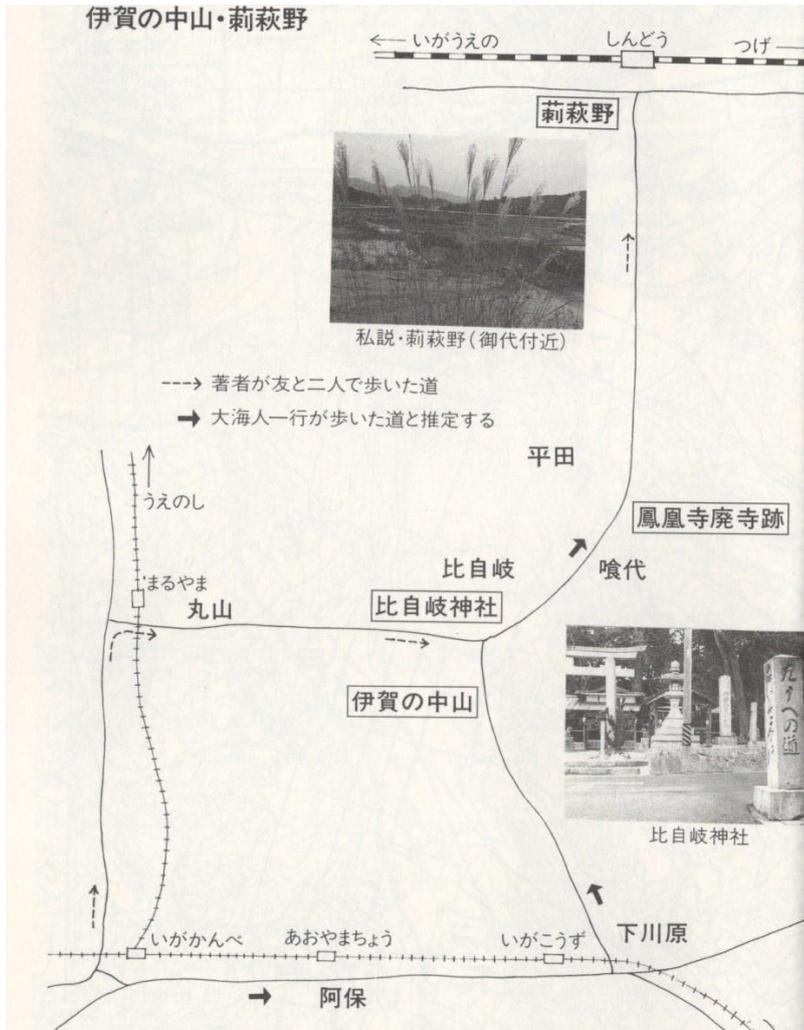
「荊萩野」の比定地



伊賀一宮の敢国神社・伊賀国府の国町遺跡また、「荊萩野」の比定地、佐那具がある。御代説もある。「荊萩野」で食事をした後に、高市軍と合流の「積殖の山口」に向かう

参照 『壬申の乱を歩く』 倉本一宏





玉城妙子説

実際に全行程を徒歩で実証されています。  
 伊賀の中山で参集した郡司は、当国郡司とあり、当国は伊賀国ではなく、伊勢国とされる。  
 大友皇子の母の実家が鳳凰寺近辺とされ、伊賀国では余に危険。比自岐神社の道標にも「右いせみち・左うへの道」とあり、式内社の存在から古道があったと推定。伊賀高津から比自岐・喰代・平田・「荊萩野」御代と推定されている。

「荊萩野」の比定地 御代界隈 炊村(かしきむら)

地名発祥 清水(しょうず)と呼ばれて地区の名水。「三国地史」(藤堂元甫編集 伊賀上野城代)が炊(かしき)あり、浙(こめかし)の井戸と呼ばれ、炊村(かしきむら)の名称の発祥。大神宮に獻(献)す所の御供米を炊く。

伊勢の鈴鹿に着。伊勢国司守の三宅連石床、介の三輪君子首、湯沐令の田中臣足麻呂・高田首新家らが、鈴鹿郡(郡家は関町加太か)で一行迎る。500人の軍兵を發し、鈴鹿の山道の守りを固めた。

大津皇子が鈴鹿関に到着

26日の朝:朝明郡の迹太川のほとりで、天照大神を望拝

大津皇子が合流

天皇一行は桑名の郡家に泊まれる。男依が美濃の軍勢3千を集め、不破の関を塞いだと報告

高市皇子を不破に遣わし、軍事の監督を命じた。

27日 天皇は皇后を桑名に残し、不破に入られた。

尾張国司小子部連鉏鉤(ちいさこべのむらじさいち)が、二万の軍兵をひきつれて天皇に帰順した。

天皇は高市皇子に「自分には謀る人がいない」皇子は天皇は1人でも私が諸将を引き連れて戦うと決意

雷雨 天皇は祈り 雷雨止む

7月2日 天皇は、紀臣阿閉麻呂・多臣品治・三輪君子首・置始連菟を遣わして、数万の兵を率い、伊勢の大山(加太越)を越えて倭に向かわせた。

瀬田の戦い

7月22日 男依ら瀬田に到達。大友皇子と郡臣たちとは、橋の西に大きく陣を構え、その後方がどこまであるのか見え

ないほどであった。軍勢の旗幟は野を覆い、そのかき立てる埃塵は天に届くほど、打ちならす鉦鼓の響きは数十里にとどろき渡り、(男依ら)の弩は続けざまに放たれて雨のように降りそそいだ。

近江方の軍兵は乱れ逃げ散り、大友皇子・左右大臣らは、その身だけはかるうじて免れ、逃走した。

7月23日 大友皇子はついに逃げ入るところがなく、立ち戻って山前(京都府乙訓郡大山崎町か?)に隠れ、みずから首をくくって死んだ。

7月26日 將軍達、不破宮に向い、大友皇子の頭を捧げる。

壬申の乱後 論功行賞 賞罰

大友皇子の首級を捧げて不破の野上行宮に凱旋 最後まで従ったのは、物部連麻呂と一、二の舎人首級を捧げたので恩賞あり。その後は左大臣までなる。

8月25日、高市皇子により。戦犯の処罰 右大臣中臣連金 死罪

左大臣蘇我臣赤兄・大納言巨勢臣比等および子孫中臣連金の子、蘇我臣果安(自害)の子は流罪。頃以外は全て許された。この後、尾張国司小子部連鉏鉤が、二万の軍兵ともに天皇に帰順したが、なぜか自殺した。

天皇は「功ある者が罪なくして死ぬこともない、何か隠したはかりごとがあったのだろうか」。

27日 武勲をたてた人々に功をほめ恩賞を賜わった

天武2年(673)2月29日 勲功者に爵位 凱旋帰還 天皇は帰路に着く

9月8日 桑名泊、9日鈴鹿泊、10日阿閉に泊、11日名張に泊。12日に倭京に帰る。

6月24日に吉野を発って、7月23日大友皇子自害 勝利まで約1ヶ月

7月22日將軍吹負 大和の地を完全平定

9月8日に凱旋帰還 大和の嶋宮にお入り

9月15日岡本宮に移られた。この冬に飛鳥浄御原宮移る

11月24日 新羅の客人・金押実ら筑紫で饗宴

12月4日 武勲を立てた人々を冠位を増加

12月15日 船一隻を新羅の客人に賜る 26日帰国

さらなる論功行賞

天武2年4月29日 大錦上坂本財臣が卒 壬申の乱功勞で少紫位 以降卒した功勞者の位上げる

8月9日 伊賀国の紀臣阿閉麻呂らに壬申の乱の功勞表彰と恩賞を賜る。

天武3年2月卒・大紫(だいし)の位を贈る。

天武3年1月10日 百濟王 昌成が薨じ小紫の位を贈る

天武4年6月23日 大分君惠尺 重病 壬申の乱勲功子孫にも手厚く賞 外小紫に昇進 後薨ず。栗隈王、物部雄君連、村国連雄依、大三輪真上田迎君、坂田公雷、紀臣堅麻呂、兵衛大分君稚見、秦造綱手、星川臣麻呂、三宅連岩床、舎人連糠虫、土師連真敷、膳臣摩漏、大伴連望多、大伴連男吹負、当麻真人広麻呂、羽田真人八国 等亡くなった後に功により位を上げる。

天武13年白鳳地震 後に詔して「伊賀・伊勢・美濃・尾張に調の時は役を免除、役の時は調免除」地震の被害もあり、壬申の乱の勞に報いた措置か

## 天武天皇としての事業

天武2年(673)3月17日「写経生を集めて、川原寺で初めて一切経の写経を始めた」・犠牲者を弔い国家の繁栄

天武2年4月14日 大来皇女が斎王として伊勢に赴く時に泊瀬齋宮で禊身を潔めて、ややに神に近づく所なり

天武3年10月)大来皇女、泊瀬齋宮より伊勢神宮に向かう

閏6月15日 新羅 使者を送り即位の祝賀

## 天武天皇の軍事方針

8月3日 石上神社の神宝・武器を磨く。忍壁皇子を遣わす。後 5年9月人ごとに兵器を検閲

天武4年2月 高安城の視察

天武8年2月 武器・馬の検査準備 検閲 11月 竜田山・大坂山に関を設け、難波に羅城築く

13年閏4月詔「政治の要は軍事 文武官は武器使用・乗馬を習え。馬・武器は備えよ。不備あれば処罰」

4年1月 占星台(せんせいだい)を建立・・・天文観察

2月 歌の上手な男女、朱儒(しゅじゅ)、伎人(わざびと)を選べ

公地公民の廃止 2月15日、天智の民部、家部を中止

4年4月10日 広瀬・竜田の神祭り始る。持統天皇に続く 常に、広瀬・竜田の神がセット

毎年4月と11月指定 雨乞いの記録 「風神を竜田の立野に祭、大忌神を広瀬の河原に祭」風神は五穀の実り、

風水害から護る農業神を祀る 奈良一番洪水の地に「水の神」広瀬神社を祀る

5年9月「新嘗祭のため占った。斎忌(ゆき)尾張国山田郡、次(すき)丹波国加佐郡となる」

大嘗祭は皇極天皇の頃だが、格別規模はこの時から

天武天皇が気にかけてこと 8年のころ

【吉野の会盟】天武8年5月5日吉野宮に行幸 天皇、皇后、草壁皇子尊(17)、大津皇子(16)、高市皇子(25)

河嶋皇子(?)4人は天武の子。忍壁皇子(22)、芝基皇子(?)2人は天智の子 合計8人 後の2人は次期天皇の

持統の代では死ぬまで昇進せず。持統の子は草壁皇子尊 この尊は皇太子もしくはそれに準ずる皇子に対する尊称。

万葉集の題詞に「日並皇子尊」(ひなみしのみこ)とも記にはある。

皇太子として、皆に認めさせ、争いを起こさないように盟約することが目的だった。

天武天皇の歌「よき人のよしとよく見てよしと言ひし 吉野よく見よよき人よく見つ」吉野宮にて

さらに、高市皇子の母は宗形徳善の娘、尼子娘(あまこのいらつめ)。大津皇子の母は天智天皇皇女の大田皇女 姉

が鷗野讚良(持統天皇) 大津皇子の姉には大来皇女、河嶋皇子の母は忍海色夫古娘(おしぬみのしこぶこのいらつめ)

忍壁皇子(22)、の母は宋人大麻呂娘のカジ媛娘(吉野から東国に赴いた際に付き従った者・母も)妹は託基皇女

(天武はカジ媛娘が好きのようだと思われる)

芝基皇子(?)志貴皇子とも記す、母は越道君伊羅都売で妻は託基皇女 現天皇の祖

天武天皇 飛鳥浄御原令 天武10年2月『朕今より更に律令を定め方式を改めんと思う』持統天皇が689年に

令だけが施行したと伝える。701年律の制定で実現。大宝律令として完成

3月帝紀・上古の校定を指示 川嶋皇子・忍壁皇子 等 古事記・日本書紀の元になるのかと思う

服装その他の改定 八色の姓と新位階制 真人・朝臣・宿禰・忌寸・道師・臣・連・稻置

14 年に四十八階を諸臣の位

新益都 天武 12 年詔「都城や宮室は一カ所だけではなく、必ず 2・3 カ所あるべき、まず難波に都をつくろう」その後、  
持統天皇に引き継ぎ、藤原京ができる。

13 年(684)10 月 14 日 白鳳地震 南海トラフ 日本書紀の記述 M8~8.3

人定(いのとき夜 10 時頃)国中の男も女も叫び合い逃げまどう 山は至るところで崩れ、川は溢れた。

諸国の郡の官舎や百姓の家屋・倉庫、社寺の破壊されたものは数知れず、人畜の被害は多大であった。

伊予の道後温泉も埋もれ湯がでなくなった。土佐国では田畑五十余万頃(約 1 千町歩)がうずまって海になった。

古老は「このような地震は、かつて無かったことだ」といった。この夕、鼓の鳴るような音が、東方で聞こえた。

「伊豆島の西と北の二面がひとりでに三百丈あまり広がり、もう一つの島になった。鼓の音のように聞こえたのは神がこの島をお造りになる響きだったのだ」という人があった。

11 月 3 日、土佐国司が報告。「高波が押し寄せ、海水が湧き返り、調税を運ぶ舟がたくさんに流失しました」

古代の地震の記録

416 年(允恭天皇)記録に残る最古

599 年(推古天皇)家屋がことごとく倒壊 指示を出し四方に地震の神を祭る(地震の神 なみ)なみふる

東は名張 名居神社

642 年(皇極元年)

664 年(天智 3)

675 年(天武 4)「大地動く」

677 年(天武 6)「大震動」

679 年(天武 8)筑紫大地震 地面が裂ける(9 km)どの村も民家が倒壊。丘の上の家が地滑りで家は損壊しなかった

福岡県南部には全長 26 km の巨大活断層がある。周期は 14000 年で数回の考古学記録

684 年に南海トラフが動いた。

14 年(685)3 月 27 日 「諸国に家毎に仏舎を作り仏像と経を置きて礼拝供養せよ」

これから 9 年 夏見廃寺金堂が完成(694)夏見廃寺埴須弥壇に「甲午年 5 月中」から 694 年

夏見廃寺の一部と二光寺廃寺とあわせ確認

天武 14 年 9 月 15 日 歌男、歌姫、笛吹く者を子孫に伝えよ、歌笛を習え

9 月 18 日 天皇、大安殿にて、王 卿を集め博戯する。

後に博戯は賭 勝負事、持統 3 年に 12 月に禁止 文武 2 年に禁止とあり、双六等のこと。

正倉院に伝わる紫檀金銀画の筒や象牙のサイ

天武天皇は仏教も大事にした。金光明経・仁王経を説く。金光明経は後に国家基本。東大寺、国分寺、国分尼寺に

この後に東大寺は「金光明最勝王経」、国分寺 国家鎮護の三部経、仁王経・法華経と共に。「金光明最勝王経」

の経典が、読誦される国を四天王が守護すると説き、写経されて諸国の国分寺に置かれた。

翌年の朱鳥元年(686)5月24日・天皇発病

6月10日 天皇の病を占う 草薙剣の祟り 即日、尾張国熱田社に送って安置させた。

6月22日 名張厨司火事 厨司は天皇の食膳に供する鳥・魚・貝類等を捕らえるための施設で名張の場合は 鮎・雑魚「あゆ」を捕る築(やな)が設けられた

7月10日 民部省(かきべのつかさ)火災 火災は意味深い

7月15日 勅して「天下のこと大小なく皇后、皇太子に申せ」

9月9日 天皇の病ついに癒えず崩御

11日に発哀(みね)する 南庭で殯宮を建て殯す

日本書紀は直ぐ後に、大津皇子謀反を企てた。

大津皇子が伊勢の姉(斎王)に逢いに行く 名張経由(686) 大津が姉斎王の大来皇女との会話は 何を話したか？

大津が姉と別れ、倭に帰っていく姿を見て 大来は大津皇子、ひそかに伊勢の神宮に下りて上り来る時に、大伯皇女(大来とも)の作らず歌2首

わが背子を 大和へ遣ると さ夜深けて 暁露に 吾が立ち濡れし

二人行けど 行き過ぎ難き 秋山を いかにか君が 独り越ゆらむ

おそらく9月30日の月の無い“あかとき”

10月2日 大津皇子 逮捕 3日訳語田の家で死を賜った。24才

妃の山辺皇女は髪を乱し、裸足で走り出て殉死した

見る者は皆すすり泣いた。 山辺皇女:天智天皇の皇女、母は蘇我赤兄の娘・常陸娘

大津皇子 辞世の歌

ももづたふ 磐余(いわれ)の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ

11月16日 伊勢神宮の斎宮であった皇女大来は、同母弟大津の罪により、任を解かれ帰京。

大来皇女 京に上る時に作らず歌

「神風の伊勢の国にもあらましを なにしか来けむ君もあらなくに」

「大意」大津の居ない国になにしに行くのか 伊勢にいたら大津は伊勢で会えるのに

伊勢で会える事の例 持統天皇7年9月9日 御齊会の夜に夢中の歌

わが大君の日の御子は どうお思いにおられるか 神風の伊勢の国は沖の藻もなびいている波に

潮の香が立ちこめている国に無性にお慕いしている 日の御子 伊勢の方で生き返ること

「見まく欲(ほ)り我(あ)がする君もあらなくに なにしか来けむ馬疲るるに」

草壁皇子尊の死 万葉集は日並皇子(ひなみしのみこ)持統天皇3年(689年)4月13日薨御(27歳)立太子となっていたと思われる。(その子が後の文武天皇・25歳で死ぬ707年)

草壁皇子は壬申の乱で最初から父天武天皇に従って吉野より出発していた。

持統天皇は夫に先立たれ、最愛の息子が死にいたたまれなくなった。大津の祟りと思ったか？

鳥谷口古墳は急遽造られたような古墳・再葬か？

日本書紀に中臣朝臣臣麻呂・巨勢朝臣多八須に2月26日に9人判事の中(大津謀反時の2人有)

3月24日に大赦 この時草壁は病と思われる 急遽大津の屍を移葬したと思われる。二上山に二上山は聖なる山  
「中臣寿詞」:(天皇の即位式および大嘗祭において、中臣氏によって奏上された祝いの祝詞)天皇が飲む水は  
「天の水」で天上の靈威の籠もる神聖な水「天の二上」の水を日々口にすることで靈的な力が得られ活力が維持さ  
れる再生の為の「ヲチ水(変若水)」で二上山はその水に深くかかわる。  
「中臣寿詞」には「天の二上」の天つ水を立奉る。その下より天の八井出(やみい)でむ。その湧き出た水を「天つ水」  
を食せ。とうたわれる。聖なる二上山に葬ることにより、草壁皇子の病が癒えると考えて、移葬したと思われる。  
9人の判事の内、先ほどの2名は関わったと思う。689年2月26日(判事)~4月13日の間に移葬と考える。  
(大来皇女は686年11月16日に伊勢から京に還っている)

3年5月 新羅の弔使者(とむらいししゃ)対応が悪く、献上物は封印して持ち帰らす。

6月24日筑紫で新羅の弔い使者の金道那(キンドウナ)をもてなす宴会を設けました。

7月15日詔 射を習う場所を築かせた。

7月20日偽兵衛 河内国の人を柏原広山を土佐国に流しました。

偽兵衛は宮を守る門番などの護衛の偽物 天皇暗殺未遂とか、クーデター未遂があったか

8月16日摂津国の武庫海、紀伊国の有田川下流、伊賀郡の身野(ムノ)三野稻城(美濃波多村)

漁獵(スナドリカリ)を禁じ、守護人(モリヒト)を置く禁漁区

持統天皇は愛しい草壁を亡くし、権力維持が困難な時、国を安定させ最愛の草壁の子軽皇子を  
絶対に天皇にするまで、私は頑張らなければ、病気に注意し、国を安定させ、国を守る。軽が天皇になるまで

3年8月 戸籍を造る 強者 武事を習わす

「射(イクサ)」を練習する場所を作らせたので、その状況を見に行ったよう。

大津皇子の屍を葛城の二神山に移し葬る時に、大来皇女の哀しみ痛みて作らず歌二首

「うつそみの人なる我や明日よりは 二上山を弟(いろせ)と我(あ)が見む」

「磯の上に生ふるあしびを手折らめど 見すべき君がありといはなくに」

持統4年1月 皇后は皇位に就かれた持統天皇 7月に皇子高市を太政大臣とした。

10月 高市皇子 藤原の宮地を視察

5年2月 詔「天武天皇の御世に仏殿・経蔵をつくり、毎月6回の齋日を行う。我が世にも行う」

10月 新益京(藤原京)の地鎮祭

11月 大嘗祭 中臣朝臣大嶋が天つ神の寿詞を読む

持統6年2月11日の詔 伊勢行幸 国の安定化「3月3日に伊勢に行こうと思う」

中納言三輪朝臣高市麻呂は表を奉り、直に言い天皇が伊勢に行くことを、農時を妨げると諫めた。

3月3日伊勢へ行幸する。大三輪高市麻呂は冠を脱いで諭す…地位を捨てて持統天皇を止めたが。

持統6年3月 伊勢行幸 神郡・伊賀・伊勢・志摩 調役免す

伊賀・伊勢・志摩の国造ら冠位を与え、合わせて今年の調役(エツキ)を免除

名張にも通過宿泊か 20日に宮に帰る。

7年1月 百濟善光に正広参位を追贈

10月 人々の備えている武器を調べる

8年5月11日 金光明経百部を諸国に届け毎月必ず1月の7日、8日頃に読め 供養料は正税を  
持統8年(694)この年は甲午年 5月11日 金光明経1百部をもって諸国に送る。

必ず年毎の正月の上玄に読 正月8日～14日に転読せよ 夏見廃寺の博伝記述日 甲午年五月中

夏見廃寺金堂はこの年には完成

11月 死刑以下の罪の者を大赦

8年12月6日 藤原京に遷都

持統10年7月 高市皇子尊が薨去 軽皇子が皇太子 高市皇子尊は皇太子であったと思われる。

皇太子の死去に伴い、次の皇太子を決める必要

『懐風藻』によれば、このとき持統天皇の後をどうするかが問題になり、皇族・臣下が集まって話し合い、葛野王の発言が決め手になって697年2月に軽皇子が皇太子になった。葛野王は大友皇子の長子 高市皇子薨じ、日嗣を立てる必要があった。時の群臣の衆議紛云。この時に葛野王奏して曰く、「我が国家の法たるや神代よりこの典を以て仰いで天心を論ず。「従来子孫相承し天位をつぐ。兄弟相及ぼさば、すなわち乱れん。」皇太后その一言で皇嗣決まる。

持統11年8月1日に文武天皇に天皇の位を譲る。文武天皇の即位 持統はホツしたのでは

万葉集28(持統天皇の歌)春過ぎて夏来るらし白妙の衣乾したり天の香具山

—終り—

## 主な参照資料

名張市史 資料編 考古

名張市郷土資料館 夏見廃寺資料館

『日本書紀』日本古典文学大系 岩波書店

『日本書紀』上下全現代語訳 講談社学術文庫

『古事記』倉野憲司校注 岩波書店 1964.1

『古事記』中村啓信 角川ソフィア文庫 2009.9

『日本古代史料学』東野治之 岩波書店 2005.3

『懐風藻』江口孝夫 講談社学術文庫 2000.10

『壬申に翔ぶ』玉城 妙子 読売新聞社 1989.10

『壬申の乱を読み解く』早川万年 吉川弘文堂 2009.12

『壬申の乱を歩く』倉本一宏 吉川弘文堂 2007.7

『壬申の乱』森浩一 他 大功社 1996.10

「伊賀国名張郡の条里と官道」山田猛 三重歴史文化研究会 2018.5

他